

コンピュータ文の主語代名詞 *Il est ... / C'est ...* の使い分けは構文
の問題か
— 西村説への疑問 —

東郷 雄二

1. はじめに

フランス語のコンピュータ文の主語代名詞として、人称代名詞の *il / elle* (以下では *il* で代表する) と、指示代名詞の *ce* が用いられ、その使用制約がよく問題になる。

(1) a. *Il est médecin.*

b. *C'est un médecin.*

c. *?Il est un médecin.*

d. **C'est médecin.*

(2) a. *Qui est le fiancé de Monique ?*

— {*C'est / *Il est*} *le vice-consul de France à Rome.*

b. *Que fait le fiancé de Monique ?*

— {*Il est / *C'est*} *le vice-consul de France à Rome.*

(1)のように属詞が職業名詞のとき、*il est / c'est* は冠詞の有無で対立する。また(2)のような文脈では、*il est* と *c'est* のどちらを用いるかがはっきりと異なる。かつて *Damourette et Pichon* (1911-1940) はこの点について、”*Nous nous heurtons maintenant à l'une des questions les plus délicates de l'usage français.*” (Tome IV, p. 550) と書いてその難しさを強調したが、この使い分けは確かにやっかいな問題で、フランス語教師泣かせと言ってもよい。しかしこの問題については過去に、*Coppieters* (1975)、*Kupferman* (1979)、*Burston & Burston* (1981)、*Ruwet* (1982)、*Tamba-Mecz* (1983)、坂原 (1990)、井元 (1991)などの優れた論考がある。本稿の筆者も東郷 (1988)、東郷 (1993)でこれを取り上げ、ほぼ解決済みと考えていた。

ところが今年になって西村牧夫氏が、西村 (2014 a)、西村 (2014 b)で本稿の筆者とは異なる見解を示されたので、西村氏の見解を詳細に検討して疑問点をあげてみたい。なお、私の批判に対して西村氏は、反論を書くことを快く承諾してくださったので、両者の論考を同時に掲載して、誌上討論の形式をとることにした。以下では敬称を略す。

2. 西村説の概要

西村は *il est / c'est* の使い分けについて、次のように主張している。

フランス語の 3 人称主語代名詞は、基本的に次のようになります。

人・物を受ける	① 〈 il (elle) + 動詞 〉
主語代名詞 :	② 〈 il (elle) + être + 形容詞・前置詞グループ 〉
il, elle, ce, (c')	③ 〈 ce (c') + être + 名詞グループ・代名詞 〉

- a. *Il travaille énormément. Enfin c'est un jeune cadre ambitieux ; mais il est sympa.*
b. *Elle est amoureuse de toi et c'est la plus belle fille du lycée.*
c. *C'était son frère, et il était son aîné de deux ans.* (西村 2014 a)

西村が示す上の表で次に動詞が来る①の場合は特に問題はない。総称を除いて *ce / ça* は使えないので、*il* だけに限られる。問題は②と③で、属詞が形容詞・前置詞グループなのか、それとも名詞グループなのかによって、*il est / c'est* の使い分けが決まるとしている点である。つまり西村は *il est / c'est* の対立を構文の問題に還元しているのである。

本稿で特に反論したいのはこの点である。*il est / c'est* の対立は構文の問題ではなく、コピュラ文が表す意味と、*il / ce* が指す指示対象の指示 (*référence*) の問題である。これは優れて意味論的な問題なのであり、構文の問題ではないことを以下で論じたい。

また西村が次のように書いているのも問題にしたい。

ただし書きといえば、最近ちょっと気になるのは「はじめて話題にするときは *c'est ...* を使い、その後は *il est ... , elle est ...* を使う」とか「その人の正体が分かっているときは、人称代名詞 (つまり *il , elle*) で受けられないので *ce* で受ける」とかというような説明です。たしかに (13) (14) のような例をよく見かけますね。

- (13) *Qui est cette personne ? — C'est le candidat du parti socialiste.*

「あの人は誰ですか」「社会党の候補者です」

- (14) *Cette jeune fille est très jolie, qui est-ce ? — C'est la sœur de Jean.*

「あの娘さん、きれいだね。誰だろう」「ジャンの妹だよ」

このように、「誰なの？」には *c'est* で答えることが多いので、「はじめて話題にするとき」とか「正体が分かっているとき」だけに *ce* を使うと思いがちです。しかし、今までの文例でも分かるように、それも錯覚で、余計なただし書きです。(西村 2014 a)

西村は「余計なただし書き」だとしているが、そうではなく、主語の指示対象の正体が分かっているかどうかは *il est / c'est* の選択にとって重要な問題である。

次に西村は次の例を分析して以下のように論じている。

- (3) a. *J'appellerai ma fille Françoise. — Et si c'est un garçon ? — Ce sera une fille. Il y a toujours eu des filles dans la famille.*

- b. *Nous élèverons cet enfant ensemble. Il sera notre enfant. Acceptez, je vous en prie.*

(3) a. では *Ce sera une fille.* で *c'est* が、(3) b. では *Il sera notre enfant.* で *il est* が用いられている。(3) a. は生まれて来る子供が女の子だろうという単なる予想を述べているが、(3) b. では

他の男との間にできた腹の中の子を自分たちの子として育てようと言っている。つまり自分たちの子ではない子供を自分たちの子にしようとしており、西村はこの指示対象の状態変化に着目して、次のように定式化している。

(4) 〈A=X〉の場合にフランス語で〈ce (c')+être+名詞グループ・代名詞〉が成立するのは、XのアイデンティティをAの代理である主語人称代名詞 *il, elle* で補強する必要がないからである。 (西村 2014 a)

(5) 動詞や形容詞では人や物のアイデンティティを保証できないので、主語人称代名詞 *il, elle* で補強し、〈*il (elle)+動詞*〉、〈*il (elle)+être+形容詞・前置詞グループ*〉の形にしなければならない。 (Ibid.)

この定式化は非常にわかりにくい。Aは主語を表しXは属詞を表すのだが、西村が着目しているのは属詞Xのアイデンティティが保証されているかどうかである。西村の言う「アイデンティティ」が指示、つまり「誰(どれ)を指しているか」でないことは明らかである。Xは属詞であり、属詞位置の名詞は非指示的なので指示を持たない。ここではアイデンティティを、Aが属するカテゴリーと解釈しておく。たとえばある自動車を指さして *C'est une voiture de sport.* と言えば、指示対象が「スポーツカー」というカテゴリーに属することを表している。

すると(4)が述べているのは、XがAの所属するカテゴリーを十分に表しているときは、*il* で補強する必要がないので *ce* を用いるということである。また(5)が述べているのは、動詞・形容詞はカテゴリーを表さないので、*il* を用いてアイデンティティを補強しなくてはならないということになる。

この定式化でよくわからないのは、*ce* がアイデンティティを補強する必要のない場合に用いられるデフォルト形式だとされている点で、ならば *ce* には積極的な機能がないのかという疑問が生じる。また *il* にはアイデンティティを補強する働きがあることが前提されているようなのだが、その前提がどこから来るのかも不明である。

3. 問題点の考察

西村の定式化を見ると、どうやら *il / ce* と属詞のあいだには次のような拮抗関係があると考えていることがわかる。

図1

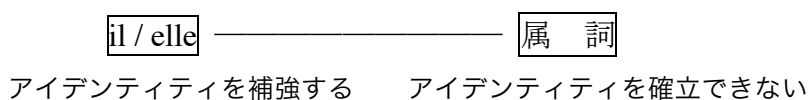
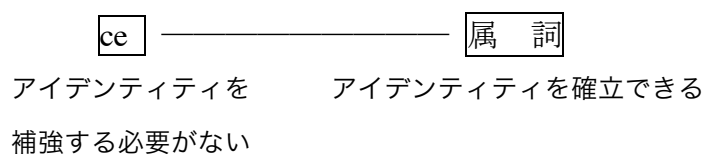


図2



この図は右から左に働いている。図1では、属詞にアイデンティティを確立する力がな

いので *il/elle* で補強する必要がある。また図 2 では、属詞にアイデンティティを確立する力があるので、主語で補強する必要がないから *ce* を用いるということになる。

もしこの読み方が正しければ、属詞の性質が *il/ce* の分布を決定することになる。しかしこの結論は正しくない。それは本稿の冒頭にあげた例(2)を見ればわかるだろう。(2) a. も(2) b. も属詞は同じ *le vice-consul de France à Rome* 「ローマ在住のフランス副領事」で、十分にアイデンティティを確立する名詞である。ならば図 2 に従って *ce* が用いられるはずで、確かに(2) a. では予測どおり *ce* が用いられているが、(2) b. では予測に反して *il* を用いている。この例は属詞の性質によって *il/ce* の分布が決まるという考え方がまちがっていることを示している。

本稿では西村とは逆の方向で考えたほうがよいと主張したい。つまり図 1 と図 2 のように、右から左へという方向で考えるのではなく、逆に左から右へと考えたほうがよいのである。すなわち、i) 指示対象 A が話し手にとってどのような認知状態にあるか、および ii) 話し手がコピュラ文を用いて A について何を陳述したいのか という発話意図によって、主語の *il/ce* および属詞が選択される。重要なのはコピュラ文の意味と、主語が指す対象の指示なのである。

4. コピュラ文の分類と意味

コピュラ文の表す意味による分類については、Declerck(1983)、Declerck (1988) が詳細に論じており、本稿では Declerck (1988) に依拠する。なお、東郷 (1988)、東郷 (1993) では「同定文」「記述文」という用語を用いたが、ここでは西山 (2003) を始め日本語学で用いられている用語に統一する¹。

4.1. 措定文 (phrase prédicationnelle、英 predicational sentence)

このタイプでは、コピュラ文「A est B」の主語 A は固有名 Paul や 定名詞句 *cette maison* のように指示的であり、指示対象がすでに確立している。つまり誰を (何を) 指すかがはっきりしている。属詞 B は非指示的であり、「A est B」は A の持つ性質・属性を表す。措定文の主語には人・物の区別なく *il* を用いる。

(6) a. *Paul est blond.* [身体特徴]

b. *Ce monsieur est médecin.* [職業]

c. *Ce vélo est à mon frère.* [所有関係]

d. *Marie est canadienne.* [国籍]

(7) a. *Paul, il est blond.*

b. *Ce monsieur, il est médecin.*

¹ Declerck (1998) では *predicational sentence*, *specificational sentence*, *descriptively-identifying sentence* の他に *identity statement* と *definition* が挙げられているが、本稿の議論には関係しないので割愛する。

- c. Ce vélo, il est à mon frère.
- d. Marie, elle est canadienne.

4.2. 指定文 (phrase spécifique, 英 specificational sentence)

指定文「A est B」の A は非指示的な役割名詞句であり、B は A に充当するべき値を表し指示的である。指定文の主語には人・物の区別なく ce を用いる。

- (8) a. Mon meilleur ami est Jacques.
- b. La capitale de la France est Paris.
- (9) a. Mon meilleur ami, c'est Jacques.
- b. La capitale de la France, c'est Paris.

4.3. 同定文 (phrase identificationnelle, 英 identifying sentence)

同定文「A est B」とは、A がどれを指すのかはわかっているが (指示的)、その正体が不明なとき、正体を述べるのに使われる。A の正体とは、人では氏名 (山田さん)、血縁 (私の従兄弟)、人間関係 (娘のピアノの先生) などで、物の場合はそのカテゴリー (バラの一種) である。同定文の A は指示的で B は非指示的な記述である。同定文では人・物の区別なく ce を用いる。

- (10) a. Jacques Delrieu est mon professeur de latin.
- b. Cet appareil est une machine à moulin des grains de café.
- (11) a. Jacques Delrieu, c'est mon professeur de latin.
- b. Cet appareil, c'est une machine à moulin des grains de café.

5. 考 察

西村は「〈A=X〉の場合にフランス語で〈ce (c') + être + 名詞グループ・代名詞〉が成立するのは、X のアイデンティティを A の代理である主語人称代名詞 *il, elle* で補強する必要がないからである」と述べているが、この言い方は倒錯している。正しくは次のように考えるべきである。

ce が用いられるのは指定文と同定文である。指定文「A est B」は、非指示的な A に指示的な B を充当する意味機能を持っている。ここで「非指示的」とは、箱にラベルが貼られていて中身が空の場合だと考えよう。La capitale de la France, c'est Paris. で名詞句 la capitale de la France は、箱に「フランスの首都」というラベルが貼られてはいるが中身が空の状態である。この文はその箱に「パリ」という中身を入れる働きを持つ。

また同定文「A est B」では、A は指示的であるがその正体が不明である。これは指定文とは逆に、箱に中身は入っているがラベルが貼られていない状態に喩えられる。Cet homme-là ? C'est le fiancé de Sandrine. という同定文は、目の前にいるが (指示的)、正体かわからない男の正体 (サンドリーヌの婚約者) を明かす働きがある。つまり同定文は中身

の入っている箱にラベルを貼る機能を持つ。

これに対して措定文は、箱の中身もありラベルも貼られている状態に対応する。**Comment est le nouveau professeur ? — Eh bien, il est sympa.** では、箱には「新しい先生」というラベルが貼られており中身も入っている。

ここから次のような一般化ができる。**ce**を用いなくてはならないAの認知状態とは、i) ラベルはあるが中身が空のとき、ii) 中身はあるがラベルがないとき、の二つの場合であり、**il**を用いることのできるAの認知状態は中身もラベルもあるときである²。つまり話し手が指示対象Aをどのように捉えているかが重要なのであり、話し手におけるAの認知状態が**il est / c'est**の選択を決めるのである。

西村は次のように述べているが、これも倒錯していると言わなくてはならない。「動詞や形容詞では人や物のアイデンティティを保証できないので、主語人称代名詞 **il, elle** で補強し、〈 **il (elle) + 動詞** 〉 〈 **il (elle) + être + 形容詞・前置詞グループ** 〉の形にしなければならない」。

そうではなくて、Aの認知状態が中身もラベルもあるという条件が満たされて初めて**il**の使用が可能になると考えるべきなのであり、**il**が何かを補強するわけではない。

最後に、主語の指示対象の認知状態と**il / ce**の選択の間になぜこのような相関があるのかという問題を考えてみたい。その答はつまるところ**il**は人称代名詞で、**ce**は指示代名詞であるというちがいに尽きる。言い換えると、**il**は言語的コントロールを受け、コトバを指す代名詞であるが、**ce**は語用論的コントロールを受けて、モノを直示的に指す代名詞である。**il**は指示対象がカテゴリー化済みであり（すなわちラベルが貼られている）、名称が確定していなければ用いることができない。同じ指示対象でも[**chaise**]とカテゴリー化されれば**elle**を、[**meuble**]とカテゴリー化されれば**il**を用いる。人称代名詞に性・数の区別があるということは、対象のカテゴリー化を前提としているということを意味する。指示対象があり、カテゴリー化されて初めて**il**を用いることができるのである。

一方、**ce**は直示的指示代名詞であり、カテゴリー化を前提としない。**ce**が性・数の区別を持たないのは、モノには性がなく、まだカテゴリー化されていない状況で用いる代名詞だからである。モノの呼び名がわからないとき、**ce**の異形態である**ça**を用いて **Donnez-moi ça.** と言えるのはこのためである。中身はあってもラベルがない、中身がなくてラベルがあるという対象の認知状態で**ce**が用いられるのは、**ce**が話し手の立場からの直示を表し、言語的コントロールを受けない代名詞だからである。

以上、**il est / c'est**の使い分けは優れて意味と指示の問題であり、構文の問題ではないことを明らかにした。

【参考文献】

² 井元 (1991) では、ラベルもあり中身もある名詞句を「十全な名詞句」と呼んでいる。

- Burston, J. M. & M. M. Burston (1918), “The use of demonstrative and personal pronouns as anaphoric subjects of the verb *être*”, *Linguisticae Investigationes* 5, 231-257.
- Coppieters, R. (1975), “The opposition between IL and CE and the place of the adjectives in French”, *Harvard Studies in Syntax and Semantics* 1, 221-280.
- Damourette, J. & E. Pichon (1911-1940), *Des mots à la pensée. Essai de grammaire de la langue française*, d’Artrey.
- Declerck, R. (1983), “It is Mr. Y or He is Mr. Y?”, *Lingua* 59, 209-246.
- Declerck, R. (1998), *Studies on Copular Sentences, Clefts and Pseudo-clefts*, Leuven Univ. Press.
- Kupferman, L. (1979), “Les constructions Il est médecin / C’est un médecin : essai de solution”, *Cahiers de linguistique* 9, 131-162.
- Ruwet, N. (1982) “Les phrases copulatives”, in N. Ruwet, *Grammaire des insultes et autres études*, Seuil, 207-238.
- Tamba-Mecz, I. (1983) “Pourquoi dit-on : Ton neveu, il est orgueilleux, et Ton neveu, c’est un orgueilleux ?”, *Information Grammaticale* 19, 3-10.
- 井元秀剛 (1991) 「人称代名詞 IL の指示対象 — 主に CE との対比において」『仏語仏文学研究』7号、東京大学仏語仏文学研究会、117-141.
- 坂原茂 (1990) 「同定文・記述文とフランス語のコピュラ文」『フランス語学研究』24、1-13.
- 東郷雄二 (1998) 「Mon frère, il est linguiste et le coupable, c’est lui. — 代名詞 IL と CE の用法について」、『フランス語フランス文学研究』53、日本フランス語フランス文学会、102-111.
- 東郷雄二 (1993) 「指示と照応 — 照応的代名詞 IL と CE の用法を中心に」、大橋保夫他『フランス語とはどういう言語か』駿河台出版社、75-94.
- 西村牧夫 (2014 a) 「立ち止まって考えるフランス語 ①②③」『ふらんす』4月号、5月号、6月号、白水社.
- 西村牧夫 (2014 b) 「Ne dites pas : « Il est un ... », mais dites « C’est un ... »」、『フランス語学研究』48, 121-124,
- 西山佑司 (2003) 『日本語名詞句の意味論と語用論 — 指示的名詞句と非指示的名詞句』ひつじ書房.